

詠

毎日歌壇

水原 紫苑 選

透明なシャーペンシルこの中にちいさなちいさなふたりのこども 横浜市 大原 香花  
 △評▽素晴らしい想像力によってもうひとつの世界が開示される。なぜ「こども」は「ふたり」なのだろう。  
 ビニールの鳥に罪はなけれども見せしめのため風に揺られる 静岡市 海瀬安紀子  
 △評▽畑につるされたものだろうか。本当はガラスは美しく聡明な鳥である。  
 あの空が直角なのは窓のせい僕には蜘蛛の糸しか見えぬ 札幌市 橋 晃弘  
 夜空にて棍棒奮うオリオンや終わる事無き旨 須崎市 野中 泰佑  
 除こなす 須崎市 野中 泰佑  
 みずからの運命しらぬ外苑の銀杏並木はただた燃える 東京 双見 きり  
 本当の貌はひとつじゃないのだとアレキサン ドライトは囁いて 松本市 飛 和  
 少年のような胸もつ仏像はかなしみ怒りの込められた洞 和歌山市 桜庭 紀子  
 月光の櫛並木を電飾に眠れぬ木々は羨みてをり 香取市 嶋田 武夫  
 全身がいろはにほへと文字なりみどり児放つ文字のいきおい 岡崎市 三上 正  
 床の間にやわらかい月を呼ぶぶよな胸部レン トゲンをを賢くください 東京 アノコ多にき

伊藤 一彦 選

第三次世界大戦のきっかけは2023年 未 来の教科書に 倉敷市 中谷 眞理  
 △評▽今年はどうな年だったか。「第三次世界大戦のきっかけ」の年と作者。その不安な予測が外れることを願いつつである。  
 内装の茶色い箱で擬態して捕食を拒むアーモンドチョコ 福津市 原田 冬  
 △評▽食べられるのを拒むユニークなチョコの歌。チョコは何の例えか深読みを誘う。  
 開戦日早く帰宅しばあちゃんの話を知っているけど 群馬 金子 歩美  
 スーパーの訳あり林檎手にとって問わず語りにつらい過去など 香取市 多田ひろみ  
 目を閉じてバスに座ればまなうらに木漏れ日たちの演じるシネマ 東京 石川 真琴  
 来てほしくないバスを待つ夕闇に浮かぶ光を君とさがして 四日市市 早川 和博  
 幸せはきつと飴玉かみしめてしまつと割れる割れないように 姫路市 田辺富士雄  
 空腹で冬眠できぬ鬼熊や草々と立つ街のアスファルト 須崎市 野中 泰佑  
 晩秋の森は夕日に輝いて私もいつか許されそうなる 仙台市 小野寺寿子  
 寝たきりと言えど確かに父はそこに居た消えて気がつく死の絶対 川西市 那須三千雄

米川千嘉子 選

ほったりと厨のアボカド柔らかく妻の乳房に触れしはいつや 山口市 平野 充好  
 △評▽皮をむいて半球状に切ったアボカドから「妻の乳房」への連想が面白い。つつましい膨らみをいとおしく思い出すのだ。  
 ひと匙のインスタントコーヒー唇にこの世の蜜を点滴の父に 大阪市 小熊 光子  
 △評▽苦いインスタントコーヒーをまさに「この世の蜜」と言ったのが心に残る。  
 転石となりてころがりいし吾を拾ってくれた元ギヤルの妻 ふじみ野市 雨雨雨汰  
 やはらかく受け止めくる白マスク亡夫の名前を呼びつつ歩く 大阪市 森川 慶子  
 見詰められ抱きしめられて進行する運動会をつつむ青空 延岡市 河野 正  
 目に見えるマスクをはずし目に見えるマスクをつける生きるということ 名古屋市 外山 雪  
 モーニング・ルーティン 林檎を噛みながら頬にチークを臉にラメを 三鷹市 菅原 海春  
 曲名がグループ名かわからない讚美か皮肉かもうわからない 金沢市 竹内 一二  
 このところ顔見ぬ人への気掛かりも織り交せて刈る一斉清掃 横浜市 島田 和生  
 六十年住みし我が家に鍵をかけ今日は施設に引っ越しをする 西東京市 佐々木節子

加藤 治郎 選

《2023年 秋》小説のト書きの如く子は眠りおり 京都市 小川 ゆか  
 △評▽子の背丈はト書きのように短いのだ。2023年秋は実際の年と季節でもある。日常の光景を巧みなレトリックで歌った。  
 地下水の枯渇かポンプの老朽化か汲み上げられる水量が減る 大津市 佐々木敦史  
 △評▽リアリズムの歌である。昭和時代の土屋文明らがこういう現実を題材とした。  
 中庭になりたい きつくこわばったあなたの頬を風でほくして 所沢市 神田 望  
 声に声を返す夕闇 晩秋の薔薇園までの道を指差す 東京 土居 文恵  
 卵割りカレーうどんに落とすとときわたしの世界コマ送りになる 東京 大島 浩彦  
 雨粒がビニール傘に結びゆく星座をみているハチ公前 中国 岸 志帆莉  
 決意が一言で蓋をされるあなたのタバコにセーター着せてる 武蔵野市 斌  
 優しいね、あなたは貞子が出てきてます髪を乾かせる人だね カナダ よだか  
 ちびっ子がクレヨンで描いたお空にミサイル飛ばすの なあぜんあぜん？ 秦野市 古林 暁  
 匂い、金木犀の…T字路を曲がる 金木犀がまた咲いている。 三鷹市 菅原 海春

25日は今年の毎日歌壇賞・毎日俳壇賞を掲載します。

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます